

勿凝学問 47

事件は現場で起きてるんだ！

——保育・教育、介護・医療政策が軽視される構造的理由のほんのひとつ——

2006年8月28日

慶應義塾大学

商学部 教授

権丈善一

「勿凝学問 46 歳出削減はいつまでつづくのか？」からのつづき	1
「事件は現場で起きてるんだ！」	1
一事は一事でしかなく万事ではない	3
最後に——人口減少社会論議と格差論議の行く末	4
参考文献	5

「勿凝学問 46 歳出削減はいつまでつづくのか？」からのつづき

「勿凝学問 46 [歳出削減はいつまでつづくのか？](#)」

...

わたくしがやりたいことは、保育・教育、介護・医療のための資源を社会から優先的に確保し、かつこれら対人サービスの平等消費が実現でき、さらに就業形態がたとえ非正規であったとしても賃金率（時間あたりの賃金）や社会保険の適用面で不利にならないという就業形態選択の自由が保障される社会をこの国が目指すように有権者を説得すること、そしてこうした社会を実現するために増税や社会保険料の引き上げをしても政治家がかわいそうな目に遭わない日本を政治家に準備することである。そうした日本を、現在の与党、野党のいずれが利用してくれようとも、わたくしにとってはどっちでも良いと言えばどっちでも良く、ともに喜ばしいことである。わたくしの論に共鳴してくれる政治家を、ブリストルでのエドモンド・バークのような憂き目に遭わせては、彼らにとってもわたくしにとっても元も子もない。彼らが選挙で勝つことのできる政治環境の整備を、有権者の方を向いて時間をかけてでも行うことが、おそらくわたくしの研究面における仕事なのであろう。

「事件は現場で起きてるんだ！」

そしてここでひとつ付け加えておきたいことは、保育・教育、介護・医療に従事する有資格専門職者には、現場で起こっているできごとを、ひろく国民に伝える努力を、今より

も意識的にはかってほしいということである。言葉の定義上、素人には分からないことをやっているのが専門家であり、専門家が直面している問題は、素人にはなかなかみえない。最近、医療面では、小松秀樹氏の『[医療崩壊——立ち去り型サボタージュとは何か？](#)』のような、医師が現場で直面している問題を記した良質の本が世に出てもいる。長年、医療に関心をもってきたわたくしでさえも把握できていなかった諸問題が、この本には実的確に描写されている。もっとも、〈国民〉と言っても、大衆層(mass public)が、こういうハードカバーのしっかりした本を読まないことは分かっている。しかしながら、民主主義的意思決定で重要な役割をはたす関心層(attentive public)——わたくし流に表現すれば、情報を司る職業に就く一票の重み以上のウェイトをもつ人たち——は、いくら他の先進国と比べたこの国のattentive publicのレベルの低さが言われているとしても、これくらいの難易度の本は理解できるだろう。

なるほど、有資格専門職者は、毎日が多忙きわまりないゆえに、現場の状況を国民に伝える時間をとることなどできるはずがないというのが正直な感想だろうと思う。統治者が労働者を政治的に大人しくさせる方法は、彼らが仕事でへとへとになるほどに毎日働かせて、彼らに閑を与えないことである。そしてたしかに今は、この国の有資格専門職者のマネジメントは、大成功しているようにみえる。小児科医や産婦人科医にみずからの惨状を世間に訴えよと言っても絶対に不可能である。小児科医、産婦人科医に限らず彼ら医療関係者にはそんな閑はない。こういう問題を考える際に思い出すのは、「クリミアの天使」と呼ばれたフローレンス・ナイチンゲール(1820-1910)の人生である。彼女は、病院に就職して看護師として働いたのはわずか3年程度しかなく、後はみずから病み、そして病床につきながら文章を書いて大英帝国の上層部に看護システムの改革案を送りつけていた。すなわち彼女は看護に従事しないですむ閑が有ったがゆえに、看護師の地位向上につとめることができたのであり、看護師として人よりも懸命に汗水ながしていたことが、彼女に偉業をなさしめたわけではないのである。政策が動くには多くの人の支持が必要となり、多くの人を動かすには情報が決定的な役割を演じるのであるから、ナイチンゲールが看護師の仕事をせずに情報発信に勤しんでいたからこそ彼女の偉業が生まれたのは、当たり前のことといえば当たり前のことである。

有資格専門職者が現場で直面している問題は、素人にはなかなかみえにくい。ところが、この国の有資格専門職者は、みずからが直面している問題を世間に知らせることができるほどには時間的にも精神的にも余裕がない。となれば、「政策は、所詮、力が作るのであって、正しさが作るのではない¹」ことを中心的命題に置く民主主義のもとでは、有資格専門職者が現場で直面している問題を解決させる力が生まれにくいことは、構造的な現象という

¹ 権丈(2005), [p.21]「再分配政策形成における利益集団と未組織有権者の役割——再分配政策の政治経済学序論」『[再分配政策の政治経済学 I](#)』第1章所収。

ことになる。

しかしそれでもやはり、否、だからこそ、「事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ！」というTPOによってはきわめて説得力をもつあの「踊る大捜査線」の名文句を、保育・教育、介護・医療の有資格専門職者のなかから国民に向けて発信することができる気概のある人物が登場してもらわなければならないのである。それしか民主主義のもとで政策を動かす方法はないように見える。「わたしには医療は分からない。だから財政論しか話さない」というのは、経済財政諮問会議議員の言葉である。これが、政府の「会議室」でなされていることである。政府が考案する医療政策のスポークスマンでさえ、医療の現場で何が起きているのかまったくと言って良いほど知らないままに、昨今の医療政策、歳出削減計画はデザインされているのである。

一事は一事でしかなく万事ではない

彼らは歳出削減を正当化するために「政府の無駄をなくす」という。しかしながら彼らが行っているのは、ただの兵糧攻めであり、削減対象にどれほどの無駄があるのかどうか

² わたくしの特技のひとつにさまざまはジャンルの芸達者を知人にもっているということがある。そこで出典を示すという意味で。「青島の“事件は現場で起きているんだ”という台詞、どういうシーンだったっけ？」という質問への回答を引用しておく。

Sent: Sunday, August 27, 2006 5:31 PM
To: Y Kenjoh
Subject: Re: 踊る大捜査線についての質問

うふふ・・・質問どうもです。

犯人のマンションをみつけて、車にもどって無線で室井さんに連絡した場面です。

青島刑事と室井管理官の無線が警察庁と警視庁のお偉方たちの会議室にもつながっていて、会議室の人たちに向かって叫んだのだと思います。

青島 「室井さん、命令してくれ、おれ、あんたの命令をきく」

警視庁の偉い人 「そこで待機だ、本庁の捜査員が行くまで待て」

青島 「室井さん！」

室井 「・・・」

警視庁の偉い人 「室井に指揮権はない、おまえは手をだすな」

青島 「被疑者と思われる人間にみられました」

警視庁の偉い人 「動くな本庁がいくまで動かないで待ってろ」

青島 「事件は会議室で起きているんじゃない。現場で起きてるんだ！」

青島 「室井さん！」

室井 「青島、確保だあ」

警視庁の偉い人 「室井、所轄にやらせるな！」

・・・でした。

踊る大捜査線シリーズに関する質問なら随時受付中です！

の検討をへて歳出削減の枠を設けているのではない。人びとは、理解できないほどに複雑な情報問題をかかえた対象に対しては、「一事が万事」流の理解をしてしまうものである。政府が財政負担・財政支援をしている公共サービスには濁りはある。けれどもその濁りは、一事であって万事ではないはずである。ところが人びとは、一事の濁りが発見、報道されると、それを政府が財政負担・財政支援をしている公共サービス万事にあてはまるものと「一事が万事」流の解釈をする。そして、その公共サービスへの財政削減、兵糧攻めに喝采を送り、そこで働く有資格専門職者への不信感を高める。

できれば、インターンシップなどを活用して専門職の現場を普通の学生に開放し、普通の生活者がいだけ専門職界への（この国で長く培われた）不信感を緩和していくための工夫も考えてもらいたいほどである。政治家の腹芸で政策が決した時代が過去のものとなり、政策を事前に国民に示して信を問う方向、すなわちマニフェスト選挙の方向へと政策形成過程が変わりつつある現在、政治家への陳情をするよりも有権者の方を向いて時間をかけてでも訴えていく方が、はるかに生産的であるはずである。

医療関係者と話をしていると、ここ数年の引上げのため先進国ではトップの水準となっている医療費自己負担額³に、他のさまざまな社会経済要因がからまった結果、この国ではすでに皆保険制度は崩壊しはじめ、医療を受けるも金次第の状況が広まりつつあるという実感をもっている人が大勢いるのに驚かされる。わたくしは学生に、ひろく政策、特に対人サービスにかかわる政策を研究するのであれば3分の1ほどの努力はルポルタージュ的な視点に費やすようにと長年話してきているのであるが、学者も地から足が離れたお遊戯、現場を知らないままの空論にもとづく——余りにも当人には無意識のうちに多くの犠牲者を輩出してしまう——政策論議はほどほどにして、保育・教育、介護・医療などの有資格専門職者たちと協働のもと、彼らの現場でいったい何が起こっているのか、それはなぜなのか、彼らが現場で直面している状況は俯瞰的視野からながめればどのように位置づけられるのか、彼らの言い分に現場のエゴが働いていないかななどを思索と理論によって濾過した公平な論を作り、ひろく国民にそれを示すくらいの、少しは世の中のお役に立つような仕事をしようではないか。

最後に——人口減少社会論議と格差論議の行く末

政策が動くための追い風がないわけではないので、下記に記しておく。

『再分配政策の政治経済学Ⅲ』, pp.618-9.
<http://news.fbc.keio.ac.jp/~kenjoh/profile/>

³ 二木(2004)〈現実の患者負担率は世界一高い〉『医療改革と病院』 pp.213-4) 参照。

2006年2月9日に行われた〔吉川洋経済財政諮問会議議員との〕対論の冒頭における司会者の質問は、「人口減社会や最近の格差問題に対してどのようにお考えですか」であった。

わたくしの回答には紙面にまとめられた言葉に加えて、次のような内容もあった。「格差があるかどうかというようなことの真偽は別として、こうした議論が盛り上がるのは大いに結構、大歓迎。だれがどんな立場からいかなる議論をしてみても、人口減少社会問題と格差問題というのはつきつめれば、医療・介護、保育・教育という4つの生活資本の整備と就業形態選択の自由が保障された社会を構築しようというところに行き着くわけですから。わたくしは随分と前から、医療・介護、保育・教育などのサービス生産のための資源を、いかにして社会から優先的に確保すればよいのだろうか考えつづけてきたわけですが、最近の人口減少社会問題とか格差問題に関する議論の盛り上がりは、わたくしが望ましいと考える社会の構築に向けて相当強く、しかも正確にアシストしてくれるものとして受け止めている」。

したがって、当面、少子化が益々進んだり、仮に格差がどんどんと拡大することがあったとしても、そのこと事態をわたくしは別に憂えたりはしない。

——そしてあるメディア関係の友からきたメールのなかの一文を引用して、とりあえず、この稿を閉じておくことにしよう。

> いずれにせよ、少子化がここまで来てしまえば「歳出削減」も逆にリアリティ
> を失ってしまうわけで・・・

参考文献

権丈善一(2006)『[医療年金問題の政治経済学——再分配政策の政治経済学Ⅲ](#)』慶應義塾大学出版会

_____ (2005)〔初版(2001)〕『[再分配政策の政治経済学Ⅰ——日本の社会保障と医療 第2版](#)』慶應義塾大学出版会

小松秀樹(2006)『[医療崩壊——立ち去り型サボタージュとは何か?](#)』朝日新聞社

二木 立(2004)『[医療改革と病院——幻想の抜本改革から着実な部分改革へ](#)』勁草書房